

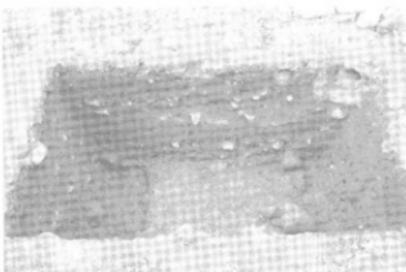
第10図 後田地区試掘調査配置図

発掘調査地遠景

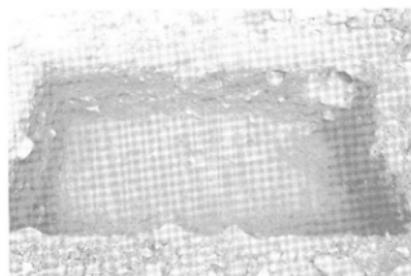
図版10



1. 第1遺構面
1. 集石（左）と石列（右）を検出



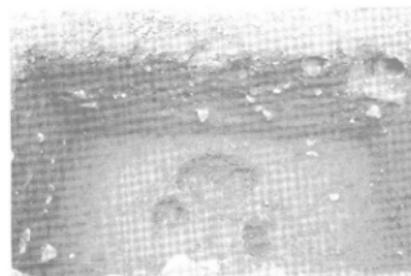
4. 発掘終了状況
砂と石の混じった土を検出



2. 第2遺構面
明黄褐色の粘土を検出



5. 調査地近景



3. 第3遺構面
土坑とビットを発掘

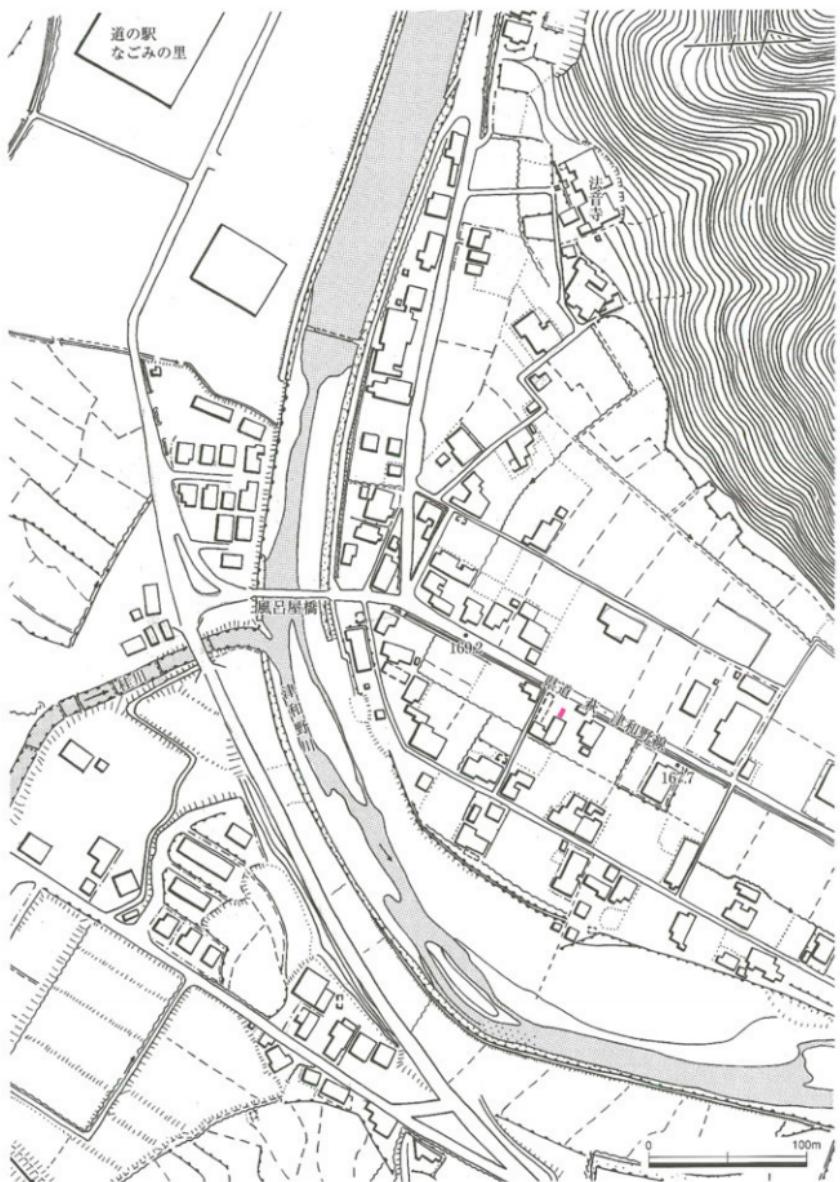


6. 出土遺物

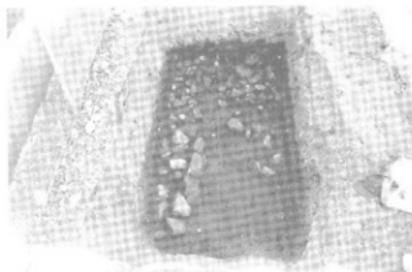
第4項 鶯原地区

- ①住所 津和野町鶯原口146・147番地
②調査原因 個人住宅新築予定
③調査内容 新築予定範囲のうち、浄化槽設置予定地を対象にし、試掘調査を1ヶ所実施。
④調査結果 遺跡の存在（城下町遺跡）を確認した。
⑤遺跡の時代と種類 近世（江戸時代）、今から140年～400年頃の集落跡・城下町
⑥主な発見遺構 枠形石組遺構、集石土坑
⑦主な出土物と概数 陶磁器（染付磁器・陶器等）コンテナ1箱、瓦（石見瓦）コンテナ1箱、
土器（土師質土器）コンテナ1箱、金属製品（寛永通宝・釘）コンテナ1箱、
焼けた礫土片コンテナ1箱、炭コンテナ1箱、須恵器コンテナ1箱
⑧調査所見 現代の造成土のある地表下約0.5m以下は、旧水田の耕作土と床土が存在していた。床土の下は、地表下約0.7～1.0mまで遺跡が存在していることを確認した。検出した遺構面（当時の生活面）は2面である。第1遺構面では、枠形石組遺構1基と集石土坑2基を検出したが、いずれの遺構も多くの石で埋められていた。枠形石組遺構の大半は調査区外のため、南辺付近の一部のみを発掘したが、一辺は約1.1m、深さ約0.9mの規模であった。石積みの奥行きは少なく、自然の川原石・割石とも用いられていた。平面形が円形でないことや湧水がないことから井戸ではないと考えられ、水溜であった可能性がある。第2遺構面では、2つの土坑を検出した。一つの土坑の外周には厚さ約10cm前後の黄褐色系の粘土が貼られていた。第1・2遺構面からは焼土・炭が出土している。このどちらかの遺構面が、鶯原の法音寺の下から出火したと伝えられる嘉永6年（1853）の大火の時期ではないかと推定される。

なお、出土遺物の中には古代の須恵器片1点が含まれていた。調査地点付近に古代の遺跡が存在していたものか、あるいは城下町の造成土とともに他所から運ばれてきた可能性もある。地表下約1m以下は砂と石の混じった土であり、この付近に人々が住み始める以前の津和野川の氾濫による堆積層であると考えられる。調査地点の字（地名）は「本丁」であり、かつて鶯原の中心であったことを示している。中世に遡る可能性のある「上市」の推定地とも考えられる。しかしながら、今回の発掘調査地点では地層が削平を受けていることもあり、中世の遺跡の存在を証明することは出来なかった。今後とも、鶯原地域での調査を継続することで、江戸時代の城下町成立以前の遺跡を明らかにしていく必要がある。



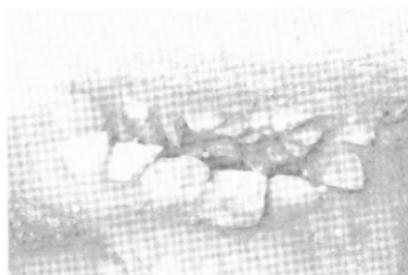
第11図 鶴原地区試掘調査配置図



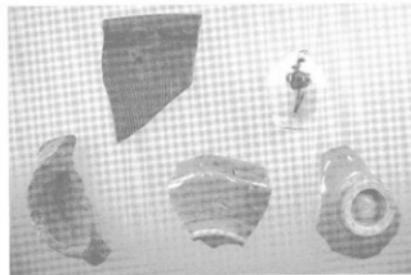
1. 集石を検出した状況



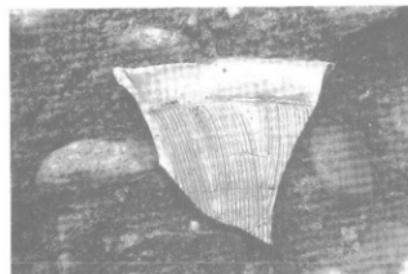
4. 集石を除去した状況後、遺構を発掘した



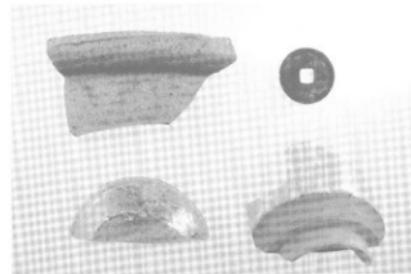
2. 桁形石組遺構を検出



5. 出土遺物（陶磁器類）



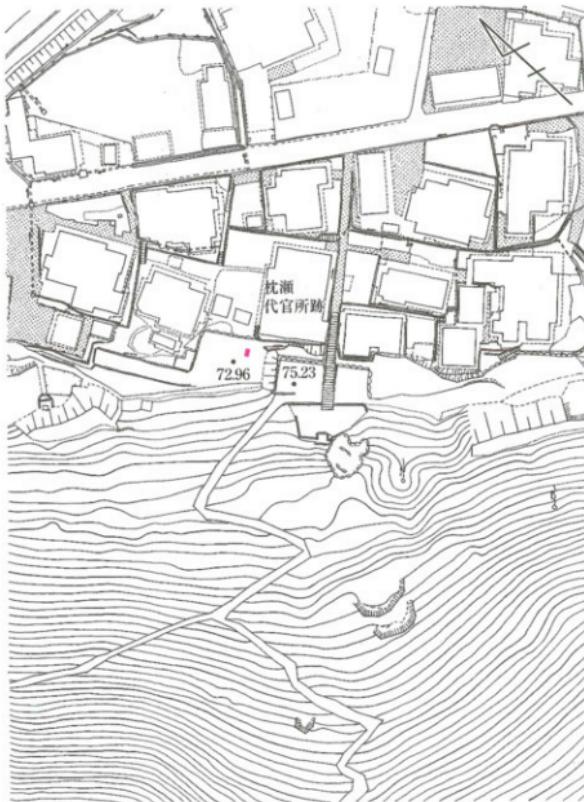
3. 掘鉢の出土状況



6. 出土遺物（陶磁器類・古銭）

第5項 枕瀬地区

- ①住所 津和野町枕瀬
- ②調査理由 急傾斜地崩対策事業予定地
- ③調査内容 工事予定範囲を対象に、試掘調査を1ヶ所実施。
- ④調査結果 遺跡の存在が確認できなかった。
- ⑤遺跡の時代と種類 なし
- ⑥主な発見遺構 なし
- ⑦主な出土物と概数 なし
- ⑧調査所見 当該事業計画区域内において、2m×1mの試掘調査を実施した。
その結果、遺物・遺構等は確認することができなかった。
しかし、計画予定地に隣接する形で枕瀬代官所が在る。



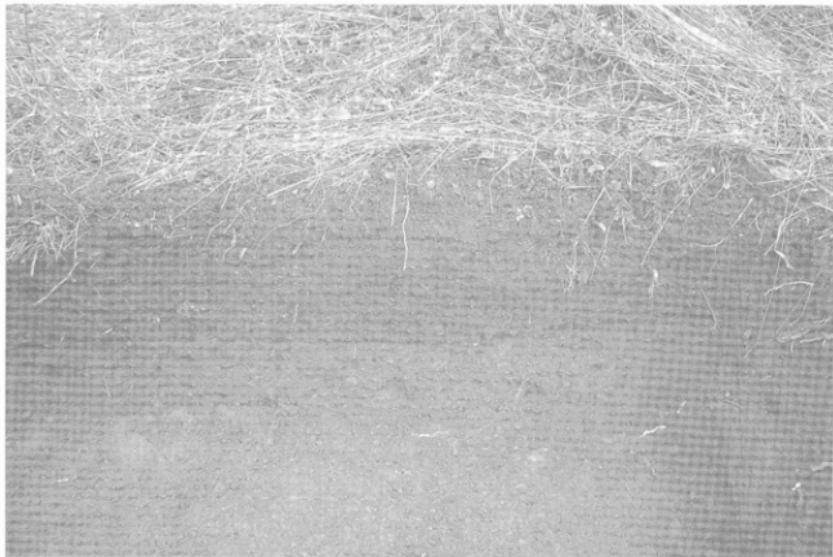
第12図 枕瀬地区試掘調査配置図



1. 調査地点近景



2. 完掘状況



1. 土層堆積状況



2. 代官所跡

第3節 平成20年度（2008）

第1項 鶴原地区

- ①住所 津和野町鶴原口260番地
②調査原因 個人住宅新築予定
③調査内容 新築予定範囲のうち、浄化槽設置予定地を対象にして試掘調査を1ヶ所実施。
④調査結果 遺跡（城下町遺跡）の存在を確認した。
⑤遺跡の時代と種類 近世（江戸時代）の城下町
⑥主な発見遺構 土坑（瓦の埋まった穴）、柱穴
⑦主な出土物と概数 陶磁器（染付磁器・陶器など）、瓦（石見瓦）、金属製品（釘）
⑧調査所見 現代の造成土の下には、旧表土が存在していた。旧表土の下は、地表下約0.35～0.7mまで遺跡が存在していることを確認した。
遺構面（当時の生活面）は、すくなくとも2面あったと推定される。第1遺構面では土坑1基、第2遺構面ではピット1基を検出した。いずれの遺構も調査区西壁面で確認したため、遺構の西半は調査区外に続いている。
第1遺構面の土坑では、焼土・炭が多く含まれた土の中から割れた石見瓦が多く出土しており、嘉永6年（1853）大火の際の痕跡である可能性が高いと考えられる。
第2遺構面のピットより下の基盤層は砂と石の混じった土であり、この付近に人々が住み始める以前の津和野川の氾濫による堆積層であると考えられる。



第13図 鶴原地区試掘調査配置図